

技術・実践

NCUでの入院直後からの継続した乳房ケアと 母親が児の前で搾乳することの効果

盛岡赤十字病院 産科病棟

浅沼 祥加

はじめに

早産や低出生体重児の出産は、多くの母親にとって思いがけない出産であり、児が新生児治療室（以下、NCUとする）へ入院となると出産直後から母子分離状態となる。そのため、NCUに入院した児が直接乳房から母乳を飲む（以下、直母とする）ことができるようになるまで、母親は母乳の量を維持できるように頻回に搾乳する必要がある。NCUへ入院する児にとって、母乳は栄養や消化、免疫学的にも多くの効果があるため、母乳分泌が促進できるような支援が重要である。現在は、褥室で出産当日または1日目に乳房の変化について母親へオリエンテーションを行い、分娩後できるだけ早期に乳頭・乳房マッサージや搾乳を開始している。母親が入院している間は、新生児室で搾乳を行い、褥室スタッフが毎日乳房観察を行っている。しかし、NCUでの乳房観察や搾乳は行っていないのが現状であり、母親が退院した後の母親の乳房のセルフケア状況については面会時に届く搾乳で量や回数を把握していることが多い。そして、直母を開始する際にはじめて乳房の状態について把握することもあった。私が関わってきた母親の中で、初めて直母を行うときに、搾乳器だけの搾乳や不十分な乳房乳頭マッサージ等により、乳頭の伸展性が不良なためにすぐに直母できないことがあった。また、母子分離状態が長期化していく際に「搾乳量が減った」「母乳が出なくなってきた」という言葉が聞かれることもあった。

そこで、NCU内で入院直後から母親が面会に来

た際に継続して乳房の状態を観察し、児の前での搾乳を試みることで、母親の母乳育児に関しての意識がどのように変化したのか1事例を通して調査したので報告する。

I. 研究目的

児が、NCUに入院した母親に対する母乳育児支援として、入院直後からNCU内で継続的に乳房観察・ケアを実施し、児の前での搾乳を試みることで、母親の母乳育児に関しての意識がどのように変化したのか明らかにする。

II. 研究方法

1. 研究対象

当院で出産しNCUに入院した児の母親で母乳育児を希望している母親

2. 研究期間

平成27年8月～9月

3. データ収集方法

1) 児が退院するまで、母親がNCUに面会に来た際に乳房ケアを毎日行う。経過が見やすいように独自に乳房チェック表を作成し、他のスタッフにも乳房観察を依頼する。乳房チェック表は、母親との関わりの中での言動も記載できるようにして情報収集する。

2) 母親が入院している間は、母乳分泌を促すため、母親の体調を見ながら無理のない範囲で16時の哺乳時間の30分前にNCUに来ていただ

き、児を見ながら搾乳を行う。その後、搾乳した母乳を哺乳する児の姿を見て頂く。または、児の状況に応じて母親に哺乳して頂く。

3) 直母を開始した後も乳房観察を続ける。看護問題として非効果的母乳栄養を立案、目標に乳房のセルフケアができるとし、授乳の様子や指導に関しては日々の看護記録から経過をまとめる。

4) プライマリーナースとして継続して関わる。

4. データの分析方法

乳房のチェック表や看護記録から乳房の状態の変化やそれに伴い行った。ケア、母親の言動を表にまとめ、乳房観察の取り組みが効果的に行えたか、母親の意識がどのように変化したか評価する。

5. 倫理的配慮

研究目的、方法、内容について明記した用紙を配布し、説明したうえで文書にて同意を得た。また、研究への参加は自由であること、参加の有無にかかわらず看護・治療への影響はないこと、本研究のデータは研究のみに使用し、プライバシーの保護にて個人情報情報は特定されないこと説明し、同意を得た。

Ⅲ. 事例紹介

1. プロフィール：Aさん 30代 初産婦 主婦
夫と2人暮らし

2. 妊娠経過：妊娠初期から開業医で妊婦健診を受けていたが、妊娠38週1日、妊娠高血圧症候群、前期破水、羊水過少のため当院へ母体搬送される。推定体重2100g台と小さく、羊水混濁もあり、搬送当日に帝王切開となる。

3. 分娩経過：妊娠38週1日、帝王切開分娩にて女児出生。

4. 母の経過：子宮復古、創部問題なし。EPDS 1点。産褥9日目に退院。母乳栄養を希望している。

5. 児の経過：出生時体重1922g、アプガースコア 8点/1分 9点/5分。出生後呼吸状態は落ちていたが、低出生体重児のためNCUに入院となる。数日間、点滴・抗生剤を使用した。消化がよく経口哺乳も順調に進み、生後18日目に退院となる。

Ⅳ. 結 果

1. 乳房の状態について

児が退院するまでは、母親がNCUに面会に来た際に乳房観察を毎日行った。

(表1・2参照)

2. 乳房のセルフケアについて

母親が乳房のセルフケアができるようになることを目標とし、日々の乳房観察とともにケアを行った。母親の様子や行ったケアについて看護記録にまとめた。(表3・4参照)

表1：母が入院中の乳房の状態、母乳分泌、搾乳状況

産褥日数	0～2日目	3日目	4～5日目	6日目	7日目	8～9日目
乳房緊満	なし	中等度	中等度	軽度	中等度	中等度
乳頭伸展性	不良	不良	不良	中	中	中
硬さ	硬い	硬い	硬い	硬い	中	中
搾乳回数	—	4回	—	8回	8回	8回
自分で搾乳できる量	—	数滴	10ml	20ml	40ml	70～90ml
介助し搾乳できる量	—	5ml	20ml	30ml	40ml	—
搾乳方法	—	手搾り	手搾り	手搾り	手搾り	手搾り・搾乳器

表2：母が退院後の乳房の状態、母乳分泌・搾乳状況

産褥日数	10～15日目	13～15日目	16日目	17日目
乳房緊満	中等度	中等度	軽度	中等度
乳頭伸展性	中	中	中	中
硬さ	中	中	中	中
搾乳回数	6～8回	7～8回	7～8回	—
自分で搾乳できる量	100ml	100ml	100ml	100ml
搾乳方法	手搾り、搾乳器	手搾り、搾乳器	手搾り	手搾り

表3：母が入院中の乳房セルフケアの状態（看護記録一部抜粋）

産褥日数	乳房の状態	母の言動	行ったケア
1日目	乳房形態：Ⅲ型 乳房緊満：なし 乳頭伸展性：不良 硬さ：硬い	昨日突然だったからびっくりです。（母乳は）できるならやりたいです。離れてるのはちょっと寂しいですね。	当院で出産された方へ配布する「ようこそ赤ちゃん」のテキストを使用し、これからの乳房の変化や母乳の利点について説明した。乳房・乳頭マッサージを実際に行いながら説明した。うなずきながら聞いており「わかりました。やってみます」と返答があった。
3日目	乳房緊満：中等度 乳頭伸展性：不良 硬さ：硬い 搾乳回数：4回 自分で搾乳できる量： 数滴介助し搾乳できる量：5ml	今日から搾り始めました。前のところではおっぱいのことあんまりしてなかったから、まだ慣れなくて。これから練習します。張ってきてて痛くなってきた。	乳房緊満が出てきたため、搾乳方法を説明し一緒に行う。短乳頭で直母となると吸啜が難しそうなので、児が吸いやすい柔らかい状態になるように乳頭マッサージ続けるよう説明した。乳房の変化、搾乳に慣れないことへのとまどいも見られたが、積極的に搾乳を行っていた。
4日目	乳房緊満：中等度 乳頭伸展性：不良 硬さ：硬い 自分で搾乳できる量：10ml 介助し搾乳できる量：20ml	自分で搾るの難しいね。昨日よりは搾れるようになったよ。いっぱい飲んでね。（新生児室より）ここでやる（搾乳する）方がいい。頑張ります。	NCUで児を見ながら搾乳する。搾乳後は、搾った搾乳を母に哺乳してもらう。乳頭マッサージの必要性を理解し、搾乳への意欲も見られた。搾乳介助をしながら児が直母する時の含ませ方など伝え、直母のイメージをしてもらった。
6日目	乳房緊満：軽度 乳頭伸展性：中 硬さ：硬い 搾乳回数：8回 自分で搾乳できる量：20ml 介助し搾乳できる量：30ml	乳首が柔らかい方がいいですね。柔らかくなるようにやってみます。赤ちゃんが飲む分搾れてよかった。	乳頭が硬めのため、乳頭マッサージ、搾乳介助を行う。乳頭マッサージの必要性を理解し、搾乳できている。母乳分泌量も増えてきて、児が哺乳する分を搾乳できて笑顔が見られた。
7日目	乳房緊満：中等度 乳頭伸展性：中 硬さ：中 搾乳回数：8回 自分で搾乳できる量：40ml	おっぱい、脇が痛いです。自分で全部搾ってます。頑張って40mlは搾るようにしました。マッサージ頑張ります。	左右外側に硬結があり、左右ともに射乳がみられる。開通本数も増えてきている。短乳頭のため直母となると吸啜が難しそうなので、乳頭マッサージを続けるよう説明した。
8日目	乳房緊満：中等度 乳頭伸展性：中 硬さ：中 搾乳回数：8回 自分で搾乳できる量：70～90ml 搾乳方法： 手搾り、搾乳器	搾乳器使ってみました。ほとんど搾乳器で、手で搾るのはちょっと触るくらいだった。	直母を開始する。乳頭がやや硬めで児の口も小さいため直接できず、乳頭保護器を使用し吸啜良好。直母量40～60g。左脇に硬結があり、直母後に搾乳介助し硬結が軽減したのを見て母自身も手搾りの必要性を理解している様子であった。搾乳器だけの搾乳にならないよう前後での手搾りを指導する。

表4：母が退院後の乳房のセルフケアの状態（看護記録一部抜粋）

産褥日数	乳房の状態	母の言動	行ったケア
10 日目	乳房緊満：中等度 乳頭伸展性：中 硬さ：中 搾乳回数：6 回 自分で搾乳できる量：100ml 搾乳方法：手搾り、搾乳器	だいぶ柔らかくなってきたと思うんだけどどうですか？やっぱり4～5時間あく自然に垂れてきますね。	乳房トラブルなく、射乳がみられる。搾乳器使用前後で手搾りもできている。退院後、搾乳4～5時間あく時があると発言あったため、3時間おきに搾乳できると良いことを説明した。
13 日目	乳房緊満：中等度 乳頭伸展性：中 硬さ：中 搾乳回数：8 回 自分で搾乳できる量：100ml 搾乳方法：手搾り、搾乳器	昨日の夜から右上のところが痛い。搾乳器が病院のと違うから、入院してた時よりは残るのかな。1時と4時のどっちかが起きれない時あるけど、3時間おきに搾っていました。	右乳房上部に発赤見られ、触診し奥の方にしこりあり。搾乳介助し軽減みられる。搾乳器使用し、残乳感あると発言あり、分泌よいため乳腺炎予防のため、手搾りをメインに行っていくことを説明する。届いた搾乳は3時間おきに搾った回数分あった。
14 日目	乳房緊満：中等度 乳頭伸展性：中 硬さ：中 搾乳回数：7 回 自分で搾乳できる量：100ml 搾乳方法：手搾り、搾乳器	昨日から右のおっぱいが痛くて熱も38.6℃もあって外来受診します。手搾りがいいって言われたので、手搾りでがんばってみようかなと思ってました。	乳腺炎症状あり。仕上げの手搾りが不足しているため、搾乳器は使用せず手搾りメインで行っていくよう再度母と確認する。
16 日目	乳房緊満：中等度 乳頭伸展性：中 搾乳回数：7～8 回 自分で搾乳できる量：100ml 搾乳方法：手搾り	おっぱい手搾りしてたらいい感じです。搾乳器やめて手搾りにしました。	乳汁うっ滞があるところは圧迫しながら搾乳できていた。
17～18 日目	乳房緊満：中等度 乳頭伸展性：中 自分で搾乳できる量：100ml 搾乳方法：手搾り	飲ませても、残ってる時は搾るようにしてました。退院してからちょっと甘いもの食べ過ぎたりしてたからな。気をつけます。救急車できた時から色々気遣ってくれてうれしかったです。おっぱい頑張ります。なにかあれば相談できるから、特に不安はないです。	1泊の泊まりマザーリング。授乳後に残乳感ある時は自分で判断し搾乳できていた。乳腺炎予防のため、ケーキや油物などの高カロリーな食事に気をつけるよう伝えた。できるだけ3時間あけずに授乳すること、哺乳時間が空いた時の乳房の状態に気をつけてもらうよう説明した。乳頭保護器を使用し直母のみで児の体重増加あり。退院となる。

V. 考 察

現状として、児がNCU入院した場合、母親が入院している間は、新生児室で搾乳を行い、褥室スタッフが毎日乳房観察を行っている。母親が搾乳を行う新生児室は、NCUに入院していない他の赤ちゃんの泣き声などが聞こえる環境である。中村は「母乳を出すためにはオキシトシンの役割が重要で、赤ちゃんのにおいや声などに反応して分泌され、オキシトシンが十分に分泌される環境を整えることが重要である」¹⁾と述べている。そのため、今回、AさんにNCUで自分の児を見ながら搾乳する環境を提供できたことは、母乳分泌を促し、搾乳を積極的に行う意欲にもつながったと考える。

今まで、NCUでの乳房観察や搾乳は行っておらず、直母を開始する際にはじめて乳房の状態について把握していた。今回の事例では、継続的に乳房観察・ケアを行ったことで、乳頭が柔らかく、母乳分泌量を維持することができた。そのため、直母開始の際は、短乳頭のため乳頭保護器を使用したのが、スムーズに直母ができ、必要量を哺乳することができたと考える。また、面会時に乳房観察を行うことで、母親が母乳について相談しやすい環境をつくることにもつながったと考える。

乳房のセルフケアについては、スタッフの母乳育児支援に対する技術に差があり、乳房の状況に応じて指導内容が変わるため、母親も混乱することが多い。今回、乳房チェック表を使用することによって、母親の搾乳状況や母親の思い、スタッフの指導内容が把握できた。そのため、スタッフ間での情報共有や統一した支援を行うことができ、乳房ケアを継続する重要性を確認できた。しかし、産褥14日目に乳腺炎を起こしたため、搾乳についての指導だけでなく、食事についての指導も行う必要があったと考える。

退院時には、「救急車できた時から色々と気遣ってくれてうれしかったです。おっぱい頑張ります」と話され、プライマリーナースとして継続的に関わることで、Aさんと信頼関係を築くことができた。Aさんの母乳育児に対して前向きな支援をしたこと

で、母乳栄養を継続することにつながっていったのではないかと考える。

母乳分泌が十分でない母親へもNCUで乳房観察を継続して行うことは、母乳育児への意識が高まり、児が乳房を吸いやすい状態にすることで直母がスムーズに行うことができるのではないかと考える。今後も母子分離状態にある母に対して、NCUで児と面会する際に継続して乳房ケアを行い、積極的に母乳育児支援を行っていきたい。

VI. 結 論

1. 母子分離状態であっても継続的に乳房観察・ケアを継続して行うことで、母乳育児への意欲が高まり、母乳分泌量の維持や直母をスムーズに行うことができる。
2. 児を目の前にして搾乳することは、母子分離に対する寂しさが軽減され、母乳育児を促進、搾乳を積極的に行う意欲につながった。
3. 乳房チェック表の使用は、母親の搾乳状況や母親の思い、スタッフの指導内容の把握も含め、統一した支援を行う手段として役立った。
4. プライマリーナースとして関わることで、信頼関係を築き、母乳育児を前向きに捉えることにつながった。

(本論文の要旨は平成28年9月18日 第31回日本母乳哺育学会・学術集会で発表した)

文 献

- 1) 中村和恵：Neonatal Care 2012 vol.25 no.8 (801)